初恋

noa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

初恋

【Ｎコード】

Ｎ１２７０Ｄ

【作者名】

ｎｏａ

【あらすじ】

主人公ナオが夢の中で出会った男の子と現実に出会ってからのお話。

私の淡い恋。。。

１９８５年　春。
中学１年生、入学式を迎えた前夜。
「誰と一緒のクラスかな？」
「隣の小学校の子と仲良くできるかな？」
「先輩に目をつけられないかな？」そんなことを考えてたら眠れなかった。
時間は、３時。ようやく眠気が・・夢の中へ・・・。

「ナオー！！起きなさい」母親の声に飛び起きる。
初めて腕を通すセーラー服。真っ白なリボン。鏡に映る自分の姿がなんだか照れくさかった。
パンをかじりながら、昨夜の夢を思い出した。
「学校のグランド。サッカーボールを蹴る男の子が私に手を振ってた。」
「でも、記憶に無い子だよな？」
「誰なんだろう？」
「何ブツブツ言ってるの？遅刻するよ」と母親の声であわてて学校へ向かう。

「おはよう」と幼馴染のちーちゃん。
「同じクラスだといいね」
「うんうん」二人でクラス表を見て名前を探す。
「えーと、私１組だよ。」
「私もー！同じクラスだね。よかったー！」教室へ向かう。ドキドキしながらの第一歩。

教室には、見たことのある顔や、見たことの無い顔、怖そうな子などイロイロ。
ガラガラガラ！！
「先生だ！！」１人の男子が叫ぶ。皆あわてて席に着く。
「おはよう。今日からこのクラスの担任の大下です。」
「早速、皆にも自己紹介してもらおうかな。」
「では、窓際の方から・・」
名前、出身校、趣味など各自イロイロ個性ある自己紹介が続く。
「私、中島ナオです。第一小学校出身です。好きなタレントは氷室京介です。」あがり症の私には精一杯の発言だった。順に自己紹介が続く・・・。
「俺、高田翔。好きな曲はＢＯＯＷＹ。好きなスポーツはサッカー。以上」
ＢＯＯＷＹの言葉に振り返った私。
「あー！！」思わず声をあげてしまった・・・。
「中島。何かあんのか？」と先生・・・。
「いーえ、何にもありません。すみません。」顔が真っ赤になってるのが自分でも分かった。
「なんで？なんで？夢の男の子だ。しかもＢＯＯＷＹが好きだなんて・・・」
これこそ夢？何で？疑問ばかりが頭をよぎる。

私の性格上話しかけるなんて絶対に出来なくて、遠くから見てるだけだった。
休み時間のサッカー姿。友達とはしゃいでる笑顔。何もかもが輝いて見えた。
「私、翔君の事好きなんだ。」
初めての恋心。締め付けられる胸。眠れない夜。何もかもが始めての経験でどうしようも無かった。話がしたい。

「同じ話題だったら話できるかな？」
「なんて話かけたらいいのかな？」そんなこと考えてる間に月日は流れ、もう１２月。
恥ずかしくて誰にも相談できず、一度も話しが出来なかった。
「冬休みだね」ちーちゃんが話しかけてきた。
「翔君にクリスマスプレゼントあげたら？」
「え？なんで？」赤面してる自分がいた。
「だって、見てたら分かるもん（´∀｀＊）ケラケラ）」
「皆にバレてるかな？」
「大丈夫だと思うよ」
「よかった。」私は、ほっとした。顔にも性格にも自信が無い私。
『ブスは嫌い』なんて言われたら私立ち直れないって思ってたから・・・。バレたらイヤだった。
「私からのプレゼントなんて受け取らないよ」
「そっかな？やさしそうだし・・って言うか何も考えてなさそうだから受け取ってもらえるよ。きっと。」
「それって、少しバカにしてない？」
「してないよー（≧д≦）」
「あげないよ。何が好きかわかんないし、気まずくなるのイヤだから・・・」
「そう？誕生日聞いてきてあげようか？」
「（●゜ェ゜）ﾉ）コクコク　でも、ばれないように・・お願い」
何の抵抗も無く話しかけることの出来るちーちゃんがうらやましかった。
私に勇気が無いのか、って言うより自信が無かった。かわいくないし、こわくて近寄ることも出来なかった。
「ＣＤとか欲しいんだって」
「ＢＯＯＷＹかな？氷室かな？ＢＬＵＥ　ＨＥＡＲＴＳ今はやってるし・・・どうしよう・・・」
「ダブんないようにしないとね」

「うん。でも、やめとく。ごめんネ。きいてくれたのに・・・」
正直、ここまで勇気の無い自分が情けなかった。

結局、中学の3年間同じクラスで居たのにまともに話も出来ずに過ごしてた。
ちーちゃんが頑張ってくれたのに・・・。

卒業式。
高校が別れてしまうんだから・・最後かも知れないから・・・頑張れ！ナオ！
「あのー。ボタンくれない？」
「中島？」名前知っててくれたんだ。
「第2ないんだけど・・いい？」
「そんな。もらえるだけでどこでもいいよ」
「じゃ、これ」
「ありがとう　じゃー」
「なぁ。今から帰って集まるんだけど来る？」
「え？？いいの？」
「いいじゃん。」
「うん」
私は、嬉しくて仕方が無かった。私服姿初めて見るかも。どうしよう私何着て行こうかな？速攻行ったら引かれるよな・・・。気持ちが舞い上がってるのがわかる。

「ちーちゃん。一緒に行ってもらっていい？」
「行ってあげる」
「よかった。1人だと心細かったんだ」
「よかったね。誘ってもらえて」
「うん」
初めての家。っていうより男の子の家って始めて。どうしたらいい

のかわからずに突っ立てた。みんなぞろぞろと入っていく。
「中島も入れよ」翔君が手を引いてくれた。
「私この手洗えないよ」
「バカ」ちーちゃんが私の手を握る。
「あー！」本気で怒る自分がなんとなくむなしく思えた。
部屋に入って、ワイワイガヤガヤ。たわいも無い話で盛り上がる。
高校の話、通学方法、好きなタレントや将来の事等。
あっと言うまに時間は過ぎて。帰らないといけない時間。
「楽しかった。誘ってくれてありがとう。」
「おぅ。いつでも来いよ。」
「いいの？」
「かまへんやん。来たら。」
「うん。」多分私、今までに無い笑顔だったかも・・。
返事をしたものの、きっと一人では無理かも。でも、ちーちゃんとは、別の高校。翔君とは、まったくの逆方面の上、最寄の駅も違ってた。きっと、これが最後なんだろうな。きちんと気持ち伝えた方がいいのかな？イロイロな事を考えながらの帰宅だった。

１９８８年　春
新しい高校。新しい制服。初めての電車通学。
３年前とは少し違う緊張感。翔君の居ない学校、やっぱり寂しかった。春休みの間やっぱり１度も電話も出来なかった。こんなに間が開くと『いつでも来いよ』の言葉も忘れられてるだろう。なにやってたんだろう・・・私。

目立つ事もなく、ただ平凡な高校生活。仲のいい友達も出来たし毎日楽しかった。でも、何か心に穴が空いてる様な感覚。考えるのは、翔君の事ばかりだった。

１９９０年　高校３年生　１１月

あれから6年目。友達に『紹介行く？』って誘われた。今で言う合コン？かな。
「私、そう言うの苦手なんだ」
「いいじゃん。カラオケしてればいいから」
「でも、女の子連れて行くって言ってるんでしょ？私なんかが行ったら・・・・」
「自信持って。好きな子でもいるの？」
「え？」真っ赤になりそうな顔を抑えきれるわけもなく。
「いるんだー。彼氏いたんだー」
「違うよ。片思い」
「片思いだったら行こうよ」
「ごめん。やめとく又誘ってね」
「そお。今度男抜きでカラオケ行こうね」
「うん。ばいばい」私は、電車に飛び乗った。付き合ってないけど、この気持ちのままで行くのは、気が引けた。なんだか失礼な気がしたし、正直『かわいい子いなかったの？他・・』なんて影で言われてたらって思うと怖かった。
「翔君に会いたい」私の中で何かが弾けた。
1度もかけたことの無い電話番号なのに、手が覚えてた。翔君の近くの駅まで乗り継ぎ公衆電話へ。受話器をとって最後の番号を押すのにどれくらいの時間が過ぎたんだろう。
「プルルルル・・・」ガチャ・・・
「はい」聞き覚えのある懐かしい声。
「もしもし、中島です。」
「中島？」
「えーっと、中学の時・・」
「あー。どうした？久しぶり」
「覚えててくれたんだ」
「覚えとーで。何？」
「あのー。昔の話になるんだけど、遊びに来てもいいって言っても

らったから・・・じゃなくて・・・近くまで来てて・・いや、用事があって近くまで来てて・・・ごめん」何が言いたいのか分からなくなってた。
「何処？」
「翔君の家の近くのお店の公衆電話から。急だったね。ごめん。気にしないで。」
「用事ないから、来れば？」
「いいの？」
「かまへんやん」
「うん」嬉しくて仕方が無かった。1人で部屋に・・てのも吹っ飛んで逢える喜びでいっぱいだった。缶コーヒーにお菓子、翔君の好きなタバコを買って・・。ピンポーン
2階から窓が開く。
「開いとるから」
「おじゃまします」2度目の家、懐かしいにおい。階段を上がる足が軽かった。今まで思いつめてた重たいものが一瞬で消えていった。
「お久しぶりです。これよかったら」好きだという感情を見せないように、女友達として話そうと決めてた。
「サンキュウー」
「久しぶりの再会に乾杯。ってどう？」
「おう。元気しとったか？」
「うん。学校楽しいし。翔君は？」
「俺、ずっと寝てる。ダルイわ。」
「遠いもんね。毎日行ってるんだよね、学校」
「行っとるけど、夜バイトしとるから眠いわ。バンドも始めたし」
「バイトにバンド？」
「今度、ライブすんねんけどこうへんか？」
「ええの？行って・・。」
「かまへんで。チケット売らなあかんし・・・あ、これはタダでええで」

「ありがとう。行くわ。日にちは、１２月２４日なんだ。イブのライブだね」
「うん。俺イブとか関係ないし」
「彼女は？」さりげなく聞けた・・。
「おらへん。男子校やし、電車の中ずっと寝とるし」
「そっか。お互い１人なんや」
「寂しいもん同士やな」こんな寂しい言葉なのに『同士』って一緒にしてもらえのが嬉かった。
「ライブ終わったら仲間と打ち上げ？」
「いいや。たいがいのヤツ彼女おるから解散かな」ナオ行けーー！！自分に応援してた。こんなに喋れる自分が凄かったし、こんなチャンスもう無いかもしれないし。
「じゃあ、ライブの後・・・・」
「俺、金ないから家でよかったら来る？」
「え？いいの？」信じられない言葉が次々と出てきてた。
「俺、用事今んとこないし」
「ケーキ買ってクリスマス会しようか」
「ついでに酒も」
「未成年だから、お子様シャンパン買って来るね」
「しゃーないか。」
「では、１２月２４日会場でね。そろそろ帰ります。お邪魔しました」
「おう。また暇やったら電話してこいや。」
「うん。またね」自分が自分でないみたいだった。あんなに喋れるんだ私って、しかも『またね』って付き合ってるみたい。いやいや、調子にのったらダメだ、翔君も友達以上には思ってないだろうし。でも、楽しみだな・・ライブ。

終業式も終わり、冬休みの始まり。久しぶりにちーちゃんとお出かけ。もちろんライブに着ていく服を買いに行く。やっぱりちーち

ゃんを巻き込んでた。
「ごめんネ。イブの日に・・」
「大丈夫。彼氏午前中バイトだから」ちーちゃんには彼氏がいた。小学校からの同級生で何年かぶりに再会して付き合うことになったみたい。
「ありがとう。彼氏とはなかよくしてる？」
「うん。ナオも翔君と付き合えたら一緒にどっか行こうね」
「そうだね。遊園地とか・・」
「じゃ、がんばんないとね」
「頑張るよ。学校離れてるし、ふられても顔合わさなくていいから・・」
「ふられるの限定な言い方だね」
「だって、凄く期待してふられるより気持ち的に楽だもん」そう。落ち込むと這い上がるのに時間のかかる私は、いつからか期待するって気持ちをなくしてたかもしれない。

１２月２４日　ライブ当日

「おはよう」ちーちゃんの声。
「おはよう。寒いから入ろうか」
「浮いてないかな、私達」
「かわいくて浮いてるかもね。」ちーちゃんの強気な発言はパワーアップしてた。
「あ、始まるよ」
「ＳＥＹＣＨＥＬＬっていってたかな？４番目みたいだから後ろに座って待ってようか。」
「うん。張り切って１番前ってのもはずかしいし」アマのバンドだけあって、人数も３０人ほど。バンド数から考えるとこんなものだろう。
「翔君出てきたよ」

「え？ボーカルなんだ」そう言えば私聞いてなかった・・・
「歌声初めて。テープレコーダー持ってくればよかった」
「目に焼付けと・・・・」ちーちゃんの声が途中から聞こえなかった。少しかすれた声。今まで見たことの無い姿、想像したより上手だった。私は、今まで以上に『好き』って言う気持ちが大きくなった。
「ナオ、ナーオ」
「え？」
「終わったよ」
「ごめん。なんかポーっとしてた」
「惚れ直してたの？私、タイプじゃないけど今日の翔君カッコよかったよ」
「うん。すっごくカッコよかった。私絶対忘れないと思う。氷室のコンサートよりよかった」恋の力ってすごい。神様って位好きだった氷室が吹っ飛んでた。
「今から家行くんでしょ。頑張って」
「うん。頑張る」
「おー！言って来い」
「おー！ばいばい」私は、その足で、クリスマスケーキ、シャンパン、プレゼントを買った。
この日の為にバイトして初めてのお給料を使う。どうしても自分のお金で買いたかったから。
ピンポーン
2階の窓を覗く・・玄関が開いた。
「入って」
「2階から声がすると思ってた」
「出迎えたろうと思って」
「ご丁寧に・・・」
「今日のお礼。来てくれてたやろ」
「わかった？」

「人数少ないし、見渡せるし」
「そうだね。いつもあんな感じ？」
「もう少し多いかな？何人かファンのついとるバンドがあるからそこが今日来てなかったからな。イブやしみんなそれどころじゃないんかも」
「そうだね。暇な一人もん同士乾杯してケーキでも食べよか。好みがわかんなかったからイロイロ買ってきたよ」
「俺、好き嫌いないから・・」
「その前に・・・」
「どないしたん？」
「これ・・・クリスマスプレゼント・・・たいしたものじゃないし・・・何を買ったらいいのかわかんなくて・・・男の子にプレゼント買ったことないから・・・」うつむいたままで顔を見れずにいた。
「ありがと」その言葉の瞬間体をそっと包んでくれた。
「俺、女から何か貰うの始めてや」
「・・・・」初めて触れる体に言葉が出なかった。
「コップ持ってくるわ」
「う、うん」
「翔君の体が離れた」ドキドキしてる。手が震えてる。顔が見れない。
「シャンパンあけよか」
「うん。ケーキはどれがいい？」何も無かったように会話を進める。きっと翔君も同じだった。どこかギクシャクする2人がいた。
「乾杯やー」この空気を吹き飛ばすように大きい声で翔君が叫んだ。
「メリークリスマス」私も大きな声で叫ぶ。ライブの話、仲間の話、中学の懐かしい話、話し出したら止まらなくなってた。さっきのドキドキも忘れてた。アルコールも入りほろ酔い気分の私達。
「私明日誕生日なんだ。こんな楽しいイブ初めてだしいい誕生日会になったよ。1日早いけど。って勝手に自分の誕生日会にしてたね・・・」

「誕生日なんだ。言ってくれたらよかったのに」
「いーよ。なんか催促してるみたいになるし・・いつも1人だから。それに、ライブに誘ってもらったし、一緒にケーキ食べれただけで良かったよ」
「女って、ようわからんな。して欲しいって言うヤツもいれば、要らないって言うヤツもいてようわからん」
「きっと、一緒にいる相手によると思うよ。居るだけでいいって思える人となら何も貰わなくても手をつないでもらってるだけで嬉しかったりするもん。私はそうだもん」酔ってる自分が怖かった。思ってることを凄く素直に言葉に出来てた。きっと気持ちバレてるだろうな・・・
「そろそろ帰る。この顔親に見られるとまずいし。」
「ほんとだ、結構真っ赤だ」その時翔君の両手が私のほっぺたに触れた。
「ぬくーいで」
「飲んでたもん、仕方ないじゃん」ドキドキする鼓動がきっと聞こえてたと思う。
「きーつけて帰りよ。これプレゼント」その瞬間翔君の唇が触れた。体の力が抜けたのがわかった。高校3年生12月遅い私のファーストキスだった。
「怒った?」翔君の声にすぐ反応できなかった。
「・・・怒ってないよ。ビックリしただけ」
「なんか、無性にしたくなったから・・」
「なれてるんだね?」皮肉っぽく言ってしまった。
「なれてなんかないよ。俺だって初めてだし。今まで女に興味もてなくてバンドが一番って思ってたから」
「ごめんなさい。そんなつもりで言ったんじゃなくて・・・」
「俺の方こそ悪かったな」
「大丈夫。怒ってないし。嬉しい」
「そっか。また来いよ。電話くれたらいいから」

「ありがとう。また電話するね」
「おう。またな」なんだか、夢のような時間だった。初めてのことばかりで・・・家までの距離が短く感じた。

進路、就職、イロイロな事がある3学期

実際のところ、進学するつもりが無かった。早く働いて自由なお金、時間が欲しかった。
でも、1年だけでも専門学校へ行きなさいと親からの通告がでた。1年我慢してみてもいいかな？翔君に会えないわけじゃないし・・・。って、私達なんなんだろう？翔君の気持ちって？今頃になって当たり前の疑問がよぎる。自分の事ばっかりで考えたこと無かった。キスしたからって付き合ってるって言えないし、彼女顔して押しかけても嫌われるだろうし、もしかしてものすごく合いに行きにくいかも？って言うか顔見れないよ。

高校　卒業式

3年間の高校生活、中学と同じで翔君への気持ちを持ったままの生活だった。6年間片思いか・・・。長いなぁ。この先もこのままなのかな？専門学校へ行っても就職してもこの先他の男の子に出会っても翔君以上の人は現れないのかな？ずっとこのままなのかな？

専門学校入学

1年間がんばろう。そう決めて入った学校。パッとしないクラスのメンバーで男子が30人女子5人というクラス編成。話が合わない！？って感じの女子ばかりだった。『私、続けられるかな？』そんな不安を抱きながら新しい生活が始まった。

翔君と最後に会ってから、６ヶ月がたってた。なんとなくかけずらかった電話を思い切ってかけてみる。プルルルル・・・
「はい」
「中島と申しますが・・翔君いらっしゃいますか？」お母さんの声に少し緊張する。
「チョッとまってね」優しい反応にホッとした。
「はい。中島？」
「久しぶり、元気？」
「久しぶりやん。どないしとったん。用事無かったら来れば？」
「でも、お母さんおるみたいやし」
「今から仕事行くやろから・・」
「じゃ、お邪魔させてもらおかな？」
「待っとくわ。玄関開けとくから勝手に入ってきて」
「う、うん」お出迎えないんだ・・少し寂しかった。でも、久しぶりの声久しぶりに会える喜びでいっぱいだった。
「おじゃましまーす」
「よっ！」
「・・・・元気そうだね」顔を見た瞬間顔が赤くなるのがわかった。
「ええもん見せたろか？」
「何々？」
「ほら」伸ばされた手には、運転免許書。
「取ったんだ。凄いね。」
「卒業してから働いた金貯めてたから・・」
「車は？買ったの？」
「買った。中古だけどＬＥＶＩＮ」
「買ったんだ。しかもＬＥＶＩＮっていいじゃん。」車には結構興味のあった私、好きな車でもあった。
「名前聞いてわかるん？」
「車好きだからね。だいたいの事はわかるよ」
「ドライブでも行く？時間大丈夫？」

「大丈夫だよ。どこ連れてってくれるの？」
「えーとこ」始めて座らせてもらう助手席『女の子では私が1番かな？』なんて考えながら座りシートベルトをはめる。
「海、見に行こか？」
「夜の海って行ったことないわー」
「じゃ、決まり」教習所の話、会ってなかった時間を取り戻すかのように話続ける。『私達ってナンなんだろう？』そんな疑問を抱きながらもこの時間を大切にしようと思った。
「着いたよ」真っ暗な駐車場。目の前の階段を上って行く。見えにくい足元につまずきそうな私にそっと手を伸ばしてくれた。『このままどっかへ行きたい。時間が止まればいいのに』昔見たアニメのセルフのような感情がこみ上げる。『私、やっぱりわすれられないだろうな』
「見てん」翔君の声で見上げる。満天の星、真っ黒な海の向こうに光る工場の明かり。始めてみる景色に感動して涙が流れてきた。
「どないした？」
「なんでもない。何か感動してもた」
「綺麗やろ。会社の先輩に教えてもらってん。」
「誰かと着たの？」また私、嫌な子になってる。
「始めてやで。ええでって聞いてたからな・・中島来るってなった時行こうおもてん」
「ありがとう。変なこと聞いてごめん」翔君の返事が無かった。どれくらい居たのかな？ほんの数十分だと思う。あまり会話が進まなかった。
「帰ろっか」
「うん」
「遅いし、送っていくわ」
「いいん？ありがとう」車の中、沈黙が続く。『何か喋らないと』気持ちばかり先走る。
「また、連れてきてもらいたいんだけどいいかな？」

「ええで。平日やったら大丈夫やから。」
「休みの日はバンド？」
「昔みたいに頻繁じゃないけど、連絡が来るのが休みの日やから」
「ライブは？」
「してないな。自分らが楽しかったらいいんってのりでやっとるから・・今」
「そっか。もう聴けないんだね　なんかさみしい」
「カラオケでも行くか？聴かしたるで」
「うん。連れてって。私すっごく下手やけど・・・」
「気持ちよく歌えてたらええねん。」
「じゃ、聴いてもらおかな私の歌。今の言葉取り消すことになるかもよ」
「そんなに下手なん？」
「超がつくよ」やっと何時ものように会話が進みだした。
「この辺やったよな」
「うん。ありがとう。ここでいいよ。車で帰って来たって知ったら何言われるかわからんから・・」
「相変らず親厳しいねんな」
「信用されてないからね」
「こんな時間やけど大丈夫か？」
「うん。時間は大丈夫だよ。ありがとう」
「また、行こな」
「連れてってなー」次の約束が出来た。また会える。そんな喜びでいっぱいだった。
　いつまでこんな事続けてるのかと考える時が多くなった。会いたいって思うし会えたときは嬉しい。でも、翔君から電話がかかってきた事は無い。私が押しかけてる。優しいから相手してくれてだけなのかな？話はしてくれるけど本当の所は何もしらないままだった。

専門学校卒業式後

1人の男の子（森本君）が声をかけてきた。
「中島。時間ある？」
「別に用事ないから・・・」
「お茶でも飲もか」
「う、うん」クラスの子、入学式に来なくて1週間が過ぎた位から登校して来たから覚えてて少しかっこいいなって思ってた子だった。
「何時もすぐ帰るけどバイトでもしてるの？」
「してないよ。」翔君から電話があるかもっていう期待からまっすぐ家に帰ってた私。
「なんか、誘っても来ないって聞いてたから」
「あー。カラオケとか買い物とか誘ってもらってたんだけど・・・」
「仲良くないん？」
「そんなこと無いんだけど・・・」
「彼氏と会ってるとか？」
「彼氏なんていないよ」ずるい私がそこにいた。『好きな子がいます』って言葉が出なかった。この状況からしてだいたいの予想はつく。翔君の事は大好きなのにキープってな感じに考えてる自分が居た。
「ホンマに彼氏おらんの？」
「おらへんよー。おるように見える？」
「じゃー付き合わへん？」
「え？」
「いきなりすぎたか・・・」
「そんなこと言われた事ないからびっくりしてん」
「そうなん？」
「あそんでそう？」
「うん」きっぱりと言われた。確かによく言われるけど・・・そういう顔なんだから仕方が無い。とっくに諦めてるが・・こうもはっきり言われるとショックだ。

「ま、考えといて。これベルの番号渡しとくから鳴らして」
「うん。」
「急がんでいいから・・・ゆっくり考えてみて」
「わかった」
「ばいばい」そう言うと走って駅へと走って行った。
なんか忙しい人。でも、嬉しい。人から思われるって・・・。マジメに考えないとね。優しそうだし友達多そうだったからいい人に違いない。翔君ともこれをきにはっきりさせようかな？
近い内に電話して会って自分の気持ち伝えよう。

後1週間でＯＬが始まる。翔君に会いたくて職場を近くに決めた。
（今で言うストーカーにちかいかも・・・）

「もしもし、翔君？」
「おー！久しぶり」
「うん。今から会える？」
「ええで。家くるか？」
「海、連れて行ってもらっていいかな？」
「ええで。今何処や？迎えに行ったるわ」
「ありがとう。駅におるねん」
「じゃ、今からでるわ」
「まってるね。」この優しさがわからない。って言うよりわがままになってる自分がいた。会えるだけで、声が聞けるだけでよかったはずが『付き合う』とか『私への気持ち』など確実なものにしたくてしかたが無かった。
目の前に止まったＬＥＶＩＮ。窓を開けてかけてくれる声。笑顔。
全てが辛くて仕方がなくなってきた。
「どないしたん？」
「うん？なんもないよ」
「何か元気ないし。飯でも食いに行こか？」

「お腹すいてんねん。行く行く。」国道沿いのファミレス。初めての食事。考えても仕方が無い。翔君に聞かないと何も解決しないんだから・・。今は楽しく。
「お腹いっぱい」
「俺も・・・」
「出る？」
「出よか？」車に乗り込む。まだ明るい空。
「海、もう行く？」翔君が尋ねる。
「翔君の行きたいところがあるんだったら、先に行っていいよ。私、夜の海の方がいから・・」
「そやな。どこいこかな？あ、ＣＤ買いたいのあったから寄って行くわ」
「私も、氷室買いたかってん。」
「買うん？ダビングしてや」
「・・・うん。いいよ」何時もなら嬉しいはずの約束がなんだか寂しかった。ダビングしたテープを渡せるのか不安だった。ＣＤを買って、再び車へ。買ったばかりのＣＤを開封し車で聴きながらドライブ。何故か喋らなくなった翔君。
「聴きいってるの？」
「・・・・・あ、うん」
「かっこいいね」
「・・・・・うん」どうしたんだろ？誘ったのが悪かったのかな？
「ごめんね」謝る私。
「なんで、あやまんねん。」
「いや、なんとなく・・・機嫌が・・・」
「ごめん。そんなつもりなかっってん。」長い沈黙が続く。
「行きたい所あんねんけどええか？」
「いいよ。何処？」
「怒らへん？」
「なんで？」翔君の返事も無いままＨＯＴＥＬに入り車を止めた。

「あかんかな？あかんわな・・・」再びエンジンをかける。
「いいよ」すんなりと言えた自分にビックリした。今日で会うの最後かもしれない・・本気で好きなんだからかまわないと思った。翔君の気持ちも確かめてないし、ただやりたいだけでやったら連絡がつかなくなるかもしれない。でも、本気で好きになった人に抱かれたいって思った。
「入ろっか」
「ええんか？」
「何回も聞かんといて。恥ずかしいし・・」お互い始めてであたふたしながら部屋に入る。
じっと座ったままの二人。何を話してどうすればいいのかわからなかった。
「シャワーする？」翔君の声にドキッとした。
「う、うん。後からでいいよ。先にどうぞ・・・」
「じゃ、先に」ホッとした。緊張がピークに達してる。タバコを1本貰い思いっきり吸い込んだ。気持ちが落ち着いて来た。冷蔵庫のワインの小瓶を一気に飲み干すと一気に酔いが回ってくる。こうでもしないとこの場に居れなかった。
「入る？」翔君の声。
「はーい」ハイテンションの私。シャワーを浴び酒の酔いがさめないうちにあがろうとおもった。用意されてたバスローブをはおい翔君のもとへ。
「酒のんだやろ」
「うん。飲まないと気持ちが・・・」
「いややったんか？」
「そう言うんじゃなくて、初めてだから・・・」
「俺も飲みたいけど、飲酒になるし・・・」
「我慢だね」笑える余裕が出てきた。ピ！！照明が落ちる。
「ホンマにええんか？」
「何回も聞かんといて。いややったら、入ってこないよ」2度目の

キス。遅い初Ｈ。始めてとは思えないくらい優しかった。出会った時の事から考えるとこんな状況夢のよう。大好きな人の腕の中に居るって幸せだと実感した。やっぱり大好きだよ。忘れられない。

ＨＯＴＥＬを出て海へ。沈黙の車内。
５度目の海。何時もの場所に車を止めて、手をつなぎ公園のある頂上へ向かう。今日こそきちんと伝えよう。これが最後かもしれないけど・・・。
「話あるんだけど・・・」
「なに？」
「すっごく長くなるけどいい？」
「聞くわ」
「あんね。中学入学式の前夜、夢を見たの。男の子がサッカーしてボールを蹴ったあと私に手を振ってくれるって夢。その子と会ったの入学式の日の同じクラスで」
「誰？」
「翔君」
「え？俺？何それなんかスゲー」
「うん。一度も顔見たことの無い翔君が夢に出てきて、次の日私の後ろに座ってるんだもん。びっくりってもんじゃなかったよ。それからずっときになって、気がついたら、１２歳で知り合って今日までずっと好きだったて言うか好きです。今日の事があったからじゃなくて前から伝えたかったの。告白したらもう会えないんじゃないかな？って怖くて言えなかった。」
「ありがとう」
「私達って今付き合ってないよね」
「うん。ごめん。中島の事嫌いじゃないしだからってすっごい好きか？ってきかれたら・・・俺はっきり返事できないかも。ＨＯＴＥＬ連れ込んどいてこんな事言える立場じゃないんだけど・・・ごめん」

「謝んなくていいよ。大丈夫だから。覚悟してたし・・」涙が止まらなくなってきてた。
「ごめんな。」そっと肩を寄せてくれる。
「そんなに優しくせんといて」感情が抑えられない。
「ごめん。本当に好きだから優しくされるとまた、舞い上がって彼女顔して電話かけちゃうでしょ。片思いだよって。今ふられたんだよって言い聞かせてるのに。」
「俺、なんて言えば・・・」
「嫌いだって言ってよ。もう顔見たくないって。じゃ、すっきり出来るから。翔君に抱かれたいって思ったからＨＯＴＥＬに行った。後悔もしてないし恨んでもないよ。嬉しかったから・・・ありがとう」
「俺もありがとう。中島と居ると楽しかったよ。ただ、恋愛感情がもてなかった。これだけはわかってほしい。やらしい気持ちだけで抱いたんじゃないから・・・」
「正直にありがとう」
「お友達でいれるかな？」
「あたりまえやん」
「って無理に決まってる。翔君に彼女が出来たらこのままの気持ち引きずってたら暴れるかもしれないよ」
「怖いな・・・」
「付き合ってもらえますか？」
「ごめん」
「ありがとう。すっきりした。専門学校の子に告白されたんだ。」
「お！もてもて」
「付き合ってみようかな？って思ってるの。相手には悪いけど、翔君を忘れるにはいいかなって思ってます。」
「悪い女」
「そんな女に誰がしたの？」
「わりー」

「いいよ。覚悟きめてたし。初恋は実らないって言うのに、ここまでいけたら上等」
「帰ろっか？」
「うん。最後のお願いいいかな？」
「なんでも」
「キスしてほしい」最後の勇気・・・。
「翔君、ありがとう」手をつなぎ車へ。空騒ぎの車内。昔話でもりあがった。
「到着」
「ありがとう」
「元気でね。」笑顔でバイバイしたかった。
「ナオも元気でな」
「始めて名前で呼んでくれたね」
「最後くらい、俺も何かしたらな・・・俺のせいで・・・」
「いいよ。人の気持ちってそんなに簡単じゃないし、無理して合わせてもらっても嬉しくないしこれでよかったんだよ。はっきりさせないといけなかったんだよ。それにこのままだとお互いいつまでも1人もんだよ」
「ほんまやな。また乾杯せなあかんようになるな」
「そうそう。では、ばいばい」
「ばいばい」
「どこかで会ったら声かけてよ。」
「彼氏と一緒じゃなかったらな」
「うん。ありがとう。」最後の握手をかわす。車が走り出す。テールライトが見えなくなって涙があふれる。『このままの状況でも良かったんじゃないか？』『今からでも遅くないよ』心の底の本心が現れる。『諦めよう』言い聞かせながら長い夜を送った。

その1年後、翔君は本当に会えない人になってしまった。

別れてから、3年
私は、専門学校の森本君と付き合っている。翔君とは違う感覚。そう、愛されるってこんな感じなんだと実感している。結婚の話も出ている。正直完全に忘れたとは居えない。
「行きたい所あるんだけど・・」
「また、海か？」
「うん。もう一度チャレンジ」
「あきらめたら？」
「あかん。絶対に行きたいねん」そう、翔君と行った海。今の彼に見せたいんじゃなく自分の気持ちにきちんと終わりをつけさせて、結婚報告を翔君との思い出の場所にしたかった。なのにたどり着けない。何度も通った道なのに海の見える公園にたどり着けない。看板や目印はかわらないのに・・・・。
「もう、つぶされたんとちゃうの？」
「そんなことないって。凄く綺麗な所って聞いてるんだもん。公園つぶさないだろうし」
「おまえに、来てもらいたくないんとちゃうか？」
「かもしれないね」私は、そうかも知れないって思うようにした。間違ってたのかな・・2人の思い出の場所・・他の人連れて行ったらダメなんだよね。翔君と私の思い出の場所。大切に大切にしないとね。

始めて出あった夢の中・・笑顔のあなた。
2度目の再会は次の日の教室。
初めての恋
初めてのキス
初めてのデート
初めてのH
大好きな人との永遠の別れ。初めてばかりだった。

現在３５歳　主婦。森本に姓を変え２人の子供の母親になっています。正直今でも、ＢＯＯＷＹの曲を聴くと涙が止まりません。きっとずっと私の心の中に居ると思います。忘れることなんて出来ないだろ。今度、１人で海に行こうと思っています。翔君がきっと導いてくれますよね。２人で見た満天の星をもう一度眺めてみたい。

終わり

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1270d/

初恋

2010年10月8日15時28分発行